

令和6年度

新潟県佐渡市立赤泊小学校

# 校内研究計画

---

## 内容

- 0 令和6年度の研究の概要
- 1 文部科学省指定研究  
子どもの実態と研究について
- 2 佐渡市複式研究会について

## 資料

- ・ になりたい自分とめざす姿
- ・ p4cについて
- ・ 道徳と対話とp4c
- ・ 赤泊小学校 学びのストーリー

---

令和6年5月10日（金）

新潟県佐渡市立赤泊小学校



## 0 令和6年度の研究の概要

赤泊小学校は今年度、令和5・6年度 文部科学省「よりよい生き方を実践する力を育む道德教育の推進事業」新潟県教育委員会委託事業を受け、道德の授業改善に取り組みます。また、令和6年度佐渡市小学校教育研究会 複式学習指導研究会の指定を受け、特別の教科 道德において、研究を行うことになりました。全職員で見通しをもち、計画的に研究を行っていきます。

令和6年度 文部科学省  
「よりよい生き方を実践する力を育む  
道德教育の推進事業」  
新潟県教育委員会委託事業

### 研究主題

願いをもち になりたい自分になるために  
学び続ける 子どもと教師  
～ p 4 c を生かした授業と対話の分析をとおして～

### 指導者

- ・新潟大学 准教授 豊田 光世 様
- ・東京大学 准教授 一柳 智紀 様
- ・両津吉井小学校 校長 平野 徹 様

### 研究発表会

令和6年9月20日(金)

### 研究内容の概要

- \* 指導者を招いての研修会
- \* 月に1回の職員研修
- ・個人授業公開研修 年2回
- ・研究発表会 (公開授業、協議会、指導)
- ・リフレクションとアンケートによる授業評価
- ・発表資料&道德アーカイブ作成

令和6年度 佐渡市小学校教育研究会  
複式学習指導研究会

・教科・領域 道德

・研修主題

対話によって考えを深める子  
～「子どもがつくる学び 子どもがつくる学校」  
をめざして～

### 指導者

- ・両津吉井小学校 校長 平野 徹 様

### 研究発表会

令和6年11月20日(水)

### 研究内容の概要

- \* 指導者を招いての研修会
- \* 月に1回の職員研修
- ・チーム授業公開研修 学期に1回
- ・研究発表会 (公開授業、協議会、指導)
- ・発表資料作成
- ・研究のまとめ作成

研修

文科「よりよい」と佐小研「複式」の関連を図り、無理なく研修を進めていく

道德の研究に限らず・・・

- ・国語や算数等の教科指導の研修
  - ・学級経営や特別活動の研修 等
- 様々な場面を活用して学ぶことができたらいなと思います。

先生方の個人研究等の学びも  
共有できれば、うれしいです。



## 赤泊小学校 R6校内研究スケジュール(案)

◎文科省「よりよい生き方を実践する力を育む道徳教育の推進事業」

⇒学級ごとの道徳（各学年2回以上公開）

**個の力 学年部の力**

- ◆学級開きでやること
  - ・キャリアパス×なりたい自分像の言語化
  - ・コミュニティボール作り&ルール確認

4月

▶5年公開（p4c道徳の見通しをもとう）

各学級でTRY！困ったらすぐ相談！

**6月7日（金）午後 校内研究**

6月

- ▶学年部ごと公開①  
低：豊田T 中：平野T 高：一柳T  
⇒対話の分析をしてみよう！



7月

◎研修会 ⇒対話分析を受けて

- ◆学期末リフレクション
  - ・なりたい自分に近づけた？
  - ・道徳と自分の成長
- ◆p4cアンケート

9月

▶文科省事業 研究発表会9/20<金>

学年部ごと公開②  
低：豊田T 中：平野T 高：一柳T  
⇒対話分析...変容した？

11月

▶複式学指研 11/20(水)

全校p4c②

12月

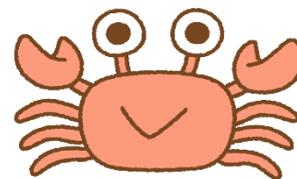
- ◆学期末リフレクション
  - ・なりたい自分に近づけた？
  - ・道徳と自分の成長
- ◆p4cアンケート

**質と量のリフレクション**

⇒2学期末までの変容まとめ。研究は続いてゆく・・・

# 1 文部科学省指定研究 子どもの実態と研究について

赤泊小学校が位置する赤泊地域は海や山が近く自然環境がとても豊かな場所にあります。子どもたちは元気で明るく、何事も活発に取り組むことができます。また、幼い頃から同じメンバーで生活しているということもあり、休み時間などでは分け隔てなく誰とでも遊ぶことができます。



しかし、学習の場面になると、協調性を重んずるあまり、自分の意見を積極的に発言しようという意欲が低下することがあります。自ら意思表示することを抑制してしまうことは、結果的に発言者が固定されてしまふことにもつながり、多面的・多角的な考えを得る機会を失うことにもつながってしまいます。このような背景には、“私の考えは誰かに否定されないだろうか” “間違えてはいないだろうか” “私が言わなくても誰かが言ってくれる”という自己肯定感や自己有用感の低さや、学習に対してどこか自分事として捉えらずに主体的になれないこと等が、要因として考えられます。

では、赤泊小学校の子どもたちがこれらの課題を解決して成長していくためには、教師は何にどう取組んでいけばよいのでしょうか。

私たちが学んできた多くの研究は、教師がめざす子どもの姿を話し合い、めざす姿を実現するための手法や手立てを考えて、これらに対する検証的な授業実践が行われてきました。そして授業後は、手法や手立ての有効性の検証を行い、手立てが有効であるから子どもたちの成長につながったと、結論を導き出してきました。教育方法や教授法の研究に焦点化されすぎて、子どもの思いが見えにくい研究になっていたのかもしれませんが、しかし、私たちが求めるのは新しい道徳の授業の手法や手立ての開発ではなく“子どもの成長”です。

先行きが不透明で、様々な情報や価値観に溢れる現代社会においては、私たち教師も学び方を変え、研究の方法も柔軟に変えていくことが大切です。研究も多くの視点から捉え直し、見つめることが求められていると思います。

そこで私たちは、子どもの実態から、教師として子どもの成長してほしい姿を語り合った上で、子どもにも自分の“めざす姿”や“なりたい自分”を考えてもらうことにしました。教師の思いを大切にしながらも、子どもの思いに寄り添うこと、子どもの願いを応援することを大切にしようと考えました。このことは、子どもが学びの主役になることを意味し、赤泊小学校の研究の主人公が子どもであることを意味しています。教師は手立ての有効性を実証するために試行錯誤するのではなく、子どもの願いを叶えるために試行錯誤し、自らの指導方法を変容させていくことにもなります。この研究は、子どもも教師も、よりよく生きるための力を育むことができる研究であると考えています。（次項図1）

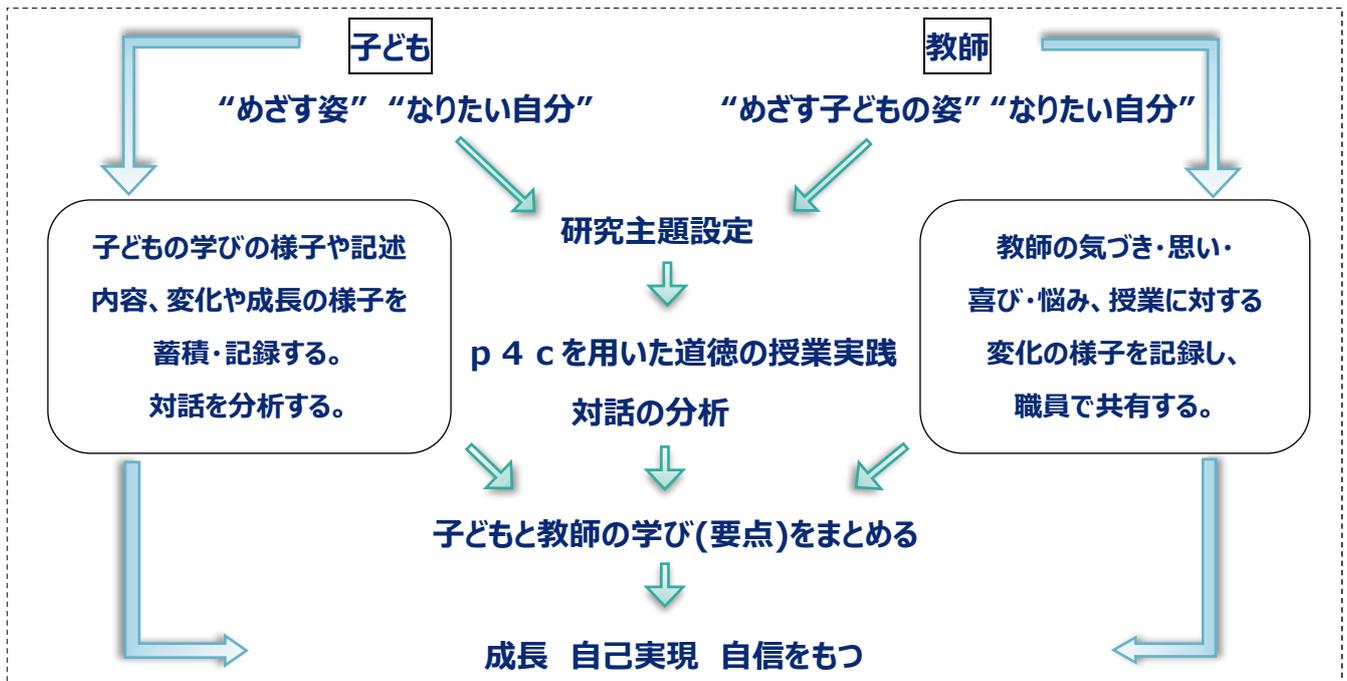


図1 赤泊小学校の研修イメージ図

赤泊小学校は「子どもがつくる学び 子どもがつくる学校」を理想とする教育像として掲げています。子どもの“やってみたい、やりたい”という気持ちを大切にした教育活動を行うことで、学校が自分たちにとって大切な学びの場であることを自覚し、自らの力で成長への道を切り拓いていくことが可能になると考えているからです。そしてこれは道徳教育においても同じです。子どもが道徳の時間を自らの成長のための時間だと認識し、自分自身の成長のために自分を見つめることで、前向きな生き方につなげることができると考えます。

これを踏まえて赤泊小学校では、数多ある道徳の教育手法の中から、探究の対話(philosophy for children : 通称 p 4 c )の手法を用いて、道徳の研究を進めていくことにしました。

p 4 c は子どもと教師が円座になり、子どもがつくった「問い」について対話をする大きな特徴です。授業における問いを教師ではなく子どもが立てることで、子どもが主体的に学習に参画するようになり、加えて探究心の高まりが期待できます。また、問いを探究するための対話の活動をととして、対話による探究という学び方を知り、次第に対話的な学びを身につけ、課題を解決する力が育つことも期待できます。また、ルールとして、問いに関して何を話しても否定されない、分からないときは発言をパスできる等があり、道徳の学習



に不安を感じている子どもも、安心して学習を進めることができます。

安心感の中で生まれる多様な考えを知ることは、自己内対話につながり、次第に道徳のねらいに迫ることにつながると考えます。

研究は2つの視点で評価を行います。それは対話の内容や振り返りの評価と、授業に対する子どもの意識の変化への評価です。

まず、対話の内容の評価ですが、道徳の時間に子どもから語られる対話の内容を分析します。子どもの語る内容が道徳的な視点で語られているのか、言葉にどのような意味が込められているのか、自分とのかかわりの中で語られているのか等を分析します。発話の量も研究を評価する際の一つの指標ではありますが、道徳の時間を苦手と感じている子どもにとっては、自分の思いを一度語ることも、勇気の要ることです。発話の量だけにこだわることなく、学習中の発話が少なかったり、無かったりした子どもに対しては、ワークシートやインタビューなどの振り返りをとおして、道徳の時間での一人ひとりの変化を見取りたいと考えています。また、1時間ごとの評価だけでなく、長期的な視点で子どもの向上的な変化を捉えることを大切に、子どものよさを認め励ますことも行っていきたいと思えます。



次に、子どもの意識の変化への評価です。学期に一度、アンケートを行い、子どもの授業への意識の変化を見取っていきます。評価の観点については、道徳の授業に対する意欲、自分とのかかわりの中で物事を考えているか等、今後、指導者の先生方を交えて作成していきます。

子どもと教師の、これらの営みをとおして、子どもがなりたい自分に近づくこと、そして、自分自身のことを語るようになることをめざし、研究を継続して行います。しかしながら、大人であってもなりたい自分に近づくことや、自分自身のことを語るのは容易ではありません。近づけず、語るができずとも、子どもを認め、励まし続け、教師が子どもに寄り添いながら学習を進めることで、少しずつ変化が表れるものだと思っています。道徳の時間や様々な活動をとおして、子ども自身が成長を実感したり、自己実現を果たしたり、自分に自信をもてるようになってほしい、そしてなりたい自分に近づいてほしい。このように願っています。

これらのことから、研究主題を

「願いをもち なりたい自分になるために 学び続ける子どもと教師

～ p 4 c を生かした授業と対話の分析をとおして～」

として、教育活動に取り組むことにしました。



## 2 佐渡市小学校教育研究会 複式学習指導研究会について

令和5年度に新潟県のいじめ見逃しゼロスクール集会の取組みの一環で、全校一斉で一つの教室に集まって道徳の授業を行いました。1学年の道徳教材である「はしのうえのおおかみ」を用いて、親切、思いやりをテーマにした授業でした。全校の子どもたちがp 4 cの手法に慣れていて、対話的な活動が行えるという強みを生かし、特別活動や清掃活動などの場面で活動する全校縦割り班で、グループ別対話の方法を用いて学習を進めました。授業の流れは以下のようなものでした。

学習の流れ	学習内容
0 教材の読み込み	各教室で事前に教材文を読んでおく。
1 教材の再確認	教材を場面ごとに分割し、教師が範読して、話の状況を理解する。
2 気付きの共有	教材を読んで、気付いたことや考えたことを確認する。
3 教師からの発問	「オオカミはどんな気持ちで動物たちを追い返していたのでしょうか？」
4 縦割り班での対話①	問いについて、縦割り班で対話する。6年生がファシリテーターを務める。
5 教師からの問い返し	「ウサギさんを通してあげたときのオオカミの気持ちは？」
6 縦割り班での対話②	問いについて、縦割り班で対話する。6年生がファシリテーターを務める。
7 各班の対話の共有	縦割り班長が、対話の内容を発表する。
8 教師からの説話	教師の説話を聞いて、学習したことの内容を振り返る。

授業では、低学年は高学年のお兄さんお姉さんの話をよく聞き、自分たちが気付くことができない新しい視点を獲得していました。高学年は低学年の純粋で真っ直ぐな意見を聞き、道徳的な価値を見直していました。中学年は自分たちの意見を懸命に伝えつつも、自分に無かった気付きを得て、大切なことは何かを様々ななかかわりのなかで捉え直していました。少人数の教室では見ることのできない子どもの姿を見ることができ、この授業方法に対する教職員の期待やワクワク感が高まりました。

そこで今年度は、「対話によって考えを深める子～子どもがつくる学び 子どもがつくる学校を目指して～」と研究主題を設定し、全校一斉の道徳授業をととして、子どもたちの成長を促していきたいと考えています。また、チャレンジングな取組みを行うことで、教師も道徳教育の学びを深め、新しい知見を獲得して力量向上に努めることができると考えます。



## なりたい自分とめざす姿

令和5年度の1学期に、子どもたちになりたい自分を聞いてみました。すると、発達の段階に応じて、子どもたちの個性豊かななりたい自分が見えてきました。以下の表に一部に掲載します。

学年	なりたい自分の一例
1 学年	友だちと仲良くしたい
2 学年	優しい人になりたい
3 学年	だれにでも優しくできる人
4 学年	困っている人がいたら、助けることができる人
5 学年	諦めずにチャレンジできる人、勇気やポジティブなパワーをもつリーダー
6 学年	相手のことを思う人、人の気持ちを考えられる人、気持ちを伝えることができる人



実は、なりたい自分を尋ねられても、答えることができない子どももいました。唐突になりたい自分を尋ねられても、日頃から考えていることではないため、答えることができなかったそうです。初めからなりたい自分がはっきりしなくてもいいですし、学びをとおしてなりたい自分が見えてくることも大切であると私たちは考えます。

また、教師も1学期に全員で集まり、改善したい子どもの実態と子どものめざす姿を話し合いました。教職の経験年数が様々な教職員集団ではありますが、全員で話し合うことで赤泊小学校の子どものめざす姿を共有しました。このことは、授業を語り合う際の子どもの姿のキーワードとなりました。

改善したい実態	めざす姿
考えを話そうとしない	自分の考えや思いを語るができる
自分の見方が正しいと 思い込む	物事を自分のこととして考えることができる 他者から見える自分を考えることができる 相手の意見を聞き、自分の考えを見直すことができる

子どものなりたい自分と教師のめざす姿が必ずしも一致しているとは言えません。しかし、子どもの願いを知ることで、教師は子どもに寄り添った教育活動を推進することができ、自らの授業改善の視点を明確にすることができます。

なりたい自分もめざす姿も簡単に叶えることはできないかもしれません。子どもも教師も、道徳の時間での対話をとおして、様々な価値に触れながら、自分のことを見つめ続けることが大切であると考えます。

## p 4 c について

p 4 c とは、円座になって毛糸のボール(コミュニティーボール)を回しながら、学級全員で意見を述べ合い、自分たちが話し合いたい問いについて、考えを深める学習方法です。

p 4 c における対話の学習に際してはルール(右図参照)があり、そのルールを授業に取り入れて子どもが安心して対話できる環境をつくれます。学習中の対話をとお

して子どもが友だちの考えに触れることで、多面的・多角的な理解が促進され、子どもの視点で授業のねらいに迫ることができると思います。p 4 c は子どもの考えを教師主導でまとめる(収束させる)のではなく、多くの価値観が内含されている状態こそが自然であるとして、子どもの考えがさらに広がっていくよう促す学習方法として世界中で取り組まれています。赤泊小学校の p 4 c の基本プロセスを以下に示します。

### p4c対話の約束 6つのルール

- ①きちんと座って
- ②ボールをもっている人が話します・決めます
- ③ボールを丁寧に 相手の名前を呼んで
- ④みんなでボールを分け合おう
- ⑤パスしても 招待しても いいよ
- ⑥言葉も行動も安全に



2023 Akadomari elementary school

	ステップ	内容
p 4 c 授業 プロセス	*	円座で座る
	①	問いを考え、決める
	②	セーフティーを確認する
	③	対話する
	④	振り返る

p 4 c の大きな特徴は、やはり子どもの問いを中心として対話を行うことです。教材に触れた子どもの知的好奇心から生まれる問いについて、子どもと教師とが一緒になって対話をするのが大きな特徴があり、子どもの学習に対するオーナーシップが育まれていきます。

また、対話のルールとしてセーフティーがあることも特徴の一つです。コミュニティーボールを用いて対話を促していきませんが、このボールが触り心地がよく、安心感があります。また、発言できるのはゴールをもっている人だけということもあり、発言者に注目が集まり、自分の意見を周りの人に聞いてもらえる状況が必然的に生まれます。自分の意見を聞いてもらえることは、うれしさや喜びにもつながり、子どもの自己肯定感や自己有用感の高まりが期待されます。赤泊小学校ではこのプロセスを基本としながらも子どもの発達段階や実態に応じて、柔軟に授業を計画し、子どもの道徳的な学びが生まれるように取り組んでいます。

## 道徳と対話と p 4 c

今、日本各地において p 4 c の手法を用いた様々な教育活動が行われています。しかし、道徳教育においては、「子どものつくる問いが道徳的な問いではないこと」や「単なる生活経験の語り合いになってしまうこと」や「対話の内容を自分とのかかわりの中で考えることができないこと」など、課題が多いです。そこで私たちは3人の指導者の先生からご指導をいただき、授業づくりを行いました。ご指導の内容を以下に要約します。

指導者	内容
<p><b>p 4 c について</b></p> <p>新潟大学 准教授 豊田 光世 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ p 4 c の対話の時間は、子どもの実態に応じて、軽重をつけていくこと。</li> <li>○ 問いを決める際には多数決で決めるが、その問いを考えた理由や背景を子どもに語らせることで、慎重に問いを選ぶことになる。</li> <li>○ 対話をファシリテートする際には、子どもの立場になることが大切。</li> <li>○ p 4 c では「発表できてよかった」の先に行きたい。でも、発表できなかった子どもの気持ちも大切に。p 4 c での子どもの気付きや学びのストーリーを見ていく。言葉で表現することが難しい子どもに対しての支援があるとよい。</li> <li>○ p 4 c での学びの深まりを感じることができない子どもには、優しく「どうして？」と訊いてみる。表現できない部分に注目することで、情緒面の支援を行う。</li> </ul>
<p><b>対話について</b></p> <p>東京大学 准教授 一柳 智紀 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 交流するとき大切なことは、せかさず、じっくり、共感的に聴くこと。</li> <li>○ 対話で学びが深まる時は、わかっていく過程を共有しているとき。</li> <li>○ 授業で実現したいのは、わからなさを共有し、一緒に考え、わかっていくこと。</li> <li>○ 対話には認知的、情動的、社会的な側面があり、そこにアプローチしていく。</li> <li>○ 対話とは「応答の連鎖」であり「聴く」ことに基づいている。聴き手がいるから話す。</li> <li>○ 道徳教育において p 4 c を中心とした対話の活動での教師の役割は。                         <ol style="list-style-type: none"> <li>1 道徳的な価値に子どもが触れかけたとき</li> <li>2 道徳的な価値に対する認識の違いが聞こえたとき</li> <li>3 道徳的な価値の対立があらわれそうなとき</li> </ol>                         の3つを大切にすること。                     </li> <li>○ 対話においては実感を伴った理解と、情動や心を動かす支援が大切。</li> </ul>
<p><b>道徳教育について</b></p> <p>下越教育事務所 指導主事 平野 徹 様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 道徳科の学びのポイントは「納得と発見」「当事者性」である。</li> <li>○ 道徳科の特製を「冰山モデル」で捉え、道徳的価値レベルで発問をしていく。</li> <li>○ 授業改善の視点として、「深める問い」を大切にする。</li> <li>○ 授業での「問い返し」のバリエーションをもつ。</li> <li>○ 教材研究の第一歩として、学習指導要領解説を読む。</li> <li>○ 対話の評価の視点は、子どもが多様に考えていたか。</li> <li>○ 子どもが「対話のオーナーシップ」を実感できているかが大切。</li> <li>○ p 4 c の中で子どもが自分のことを語れるか、自我関与が求められる。</li> </ul>

## 赤泊小学校 学びのストーリー

p 4 c の手法を用いた授業は各学年で実施してきました。経験年数もキャリアも異なる教師が様々な工夫を凝らして、子どもと学びを積み重ねてきました。ここでは令和 5 年度の 2 学期に行われた授業について、子どもの学びと教師の指導の様子の 2 つの視点から振り返ります。

振り返る視点は「子どもの対話の様子」と「教師の指導の様子」です。そして、ここに載せた振り返りは授業後の協議会で教師が語った内容です。協議会で語られたことを基に、になりたい子どもをめざすための教師の視点や授業の在り方を話し合うことで、よりよい道德の授業に向けてみんなで一歩ずつ歩を進めています。

### (1) 学びの振り返り

10月5日(木) 2学年 道德 土屋講師 教材「お月さまがみている」

主題名「だれもみていなければしてもいいの？」 内容項目 A-(2) 正直、誠実

問い「正一は、しきちないものだとわかっているはずなのに、なんでとろうとしたのか？」

子どもの対話の様子	教師の指導の様子
○問いに対して多くの子どもが考えを発言した。 ○友だちの話を聞こうとする子どもが多かった。 △対話の流れに自分の考えるスピードが追いつかずに、思考が止ってしまう子どもが数名いた。 △授業前と授業後に子どもの考えの変容があまり見られなかった。	○子どもの問いで学習を進めていた。 ○セーフティーを大切に、学習環境をつくっていた。 ○子どもの対話でのキーワードをメモし、子どもに見えるように円座の真ん中に置いていった。 △子どもの対話をメモ用紙に記述することに懸命になり、対話に参加できていなかった。

#### になりたい自分をめざす子どものための教師の視点や授業の在り方

- ・ 子どもが対話を進めるのはよいが、任せすぎないことが大切。道德的価値の認識が社会規範から逸れていると認知したときは、教師が対話に介入し、社会規範を正しく教えていくことが大切。
- ・ 対話が拡散することで、道德的価値を多面的・多角的に理解できる可能性がある。しかし、拡散しすぎた場合は、一度対話を整理し、問いに立ち戻り、子どもの思考を整理することが必要。



10月18日(水) 5学年 道徳 岡崎教諭 教材「まかせてみようよ」

主題名「よいと思う考えがちがうとき」 内容項目 B-(11) 相互理解、寛容

問い「安心して任せられる人って、どんな人？」

子どもの対話の様子	教師の指導の様子
○子どもたちが、問いを考えた背景を語っていた。 ○子どもでボールを回し、自然な流れで対話が行われ、全員で対話しようとする意志が見えた。 ○一つの発言に対して、質問したり、自身の経験を語ったりする様子が見られた。 △対話の時間が短く、もう少し必要としていた。	○子どもに問いを作った理由や思いを説明させて、問題意識について共通理解させていた。 ○対話の内容を構造的な板書で示していた。 △教師が適宜、対話に介入していた。しかし、もう一步対話に踏み込めば、深い学びへと進むことができたように思えた。

なりたい自分をめざす子どものための教師の視点や授業の在り方

- ・ p 4 c の空気感を大切に。安心して安全で発言をしても否定されない雰囲気や、発言をしたときにあいづちをうってくれる友だちがいることで、よい対話が生まれてくる。
- ・ 道徳的価値に対しての表面的な理解から、本質的な理解に向かうために、その時に教師が子どもに気付いてほしい考え方について、もう一步踏み込むことが大切。



10月25日(水) 1学年 道徳 本間教諭 教材「ふうたのやくめ」

主題名「すきらいで、行動をかえない」 内容項目 C-(11) 公正、公平、社会正義

問い「ふうたはどうして、こころがすっきりしたの？」

子どもの対話の様子	教師の指導の様子
○子どもが問いをつくり、その問いで学習していた。 ○意見がある子どもが手を挙げ、教師が指名するのではなく子どもがボールを投げることで、子どものつながりを生かした対話が生まれていた。 △ゴールが見えにくい対話に不安やモヤモヤを感じ、対話への意欲が低下する子どもがいた。	○教師が丁寧に問い返しを行っていた。 ○円座では緊張が高まる子どもがいることに配慮し、スクールタイプの形態で授業を展開していた。 ○言語化が難しい子どもの支援のために、発言しなくても自分の考えを伝えることができるように表情が描かれたペープサートを活用していた。

なりたい自分をめざす子どものための教師の視点や授業の在り方

- ・ 授業のねらいに向かうために、場面理解や心情理解について丁寧に問答して理解させることが大切。
- ・ 円座でなくても、ボールを介して、子ども同士のやりとりが繋がっていた。形態は様々でもよいが、友だちのリアクションが見え、子どもの中の「みんなでひとつになって対話するんだ」という意識を大切にする。
- ・ 特別な支援を要とする子どもに対する p 4 c の在り方を問い続けていく。対話中に「わからない」「できない」「困っている」だろう子どもに対する支援について、方法を模索していく必要がある。

10月27日(金) 3・4学年 道徳 高柳教諭 教材「せきが空いているのに」  
 主題名「人に親切にするって、どういうこと？」 内容項目 B-(6) 親切、思いやり  
 問い「なぜおじさんは、窓の方を見て、うれしそうな顔をしていたのか？」

子どもの対話の様子	教師の指導の様子
○問いをよく選び、一度選んだ問いから「話が広がりそう」という理由で、問いを変更していた。 ○友だちの発言や教師の問い返しを受けて、自らの考えを深めようとしていた。 ○対話では登場人物を語りつつも「ぼくなら・・・」「私なら・・・」と自分の思いを語っていた。 △対話で考えが変わったと思った子どもでも、振り返りで「考えが変化しなかった」と答えていた。	○授業のはじめに「テーマは何でしたか？」と問いかけ、本時の学びにおける子どもの思考を焦点化していた。 ○子どもの対話を大切にしながらも、介入のタイミングや、問い返しを見定めていた。 △積極的に考えを述べる子どもの発言で対話が進んだため、発言をしていない子どもへの注目がやや薄れていた。

なりたい自分をめざす子どものための教師の視点や授業の在り方

- ・ 安心した環境の中で、子どもが主人公に自らを投影することで、自分の思いや考えを、感情語を交えながら自然に語り始めていた。子どもの自我関与と自己開示が、対話の深まりでは大切。
- ・ 教師が一人の対話者として教室に居つつも、教師として対話を俯瞰しながら子どもの考えや思考の流れを探ることが、教師の適切な介入へとつながる。



10月31日(火) 6学年 道徳 川上教諭 教材「ブランコ乗りとピエロ」  
 主題名「広い心」 内容項目 B-(11) 相互理解、寛容  
 問い「なぜピエロはサムをブランコから引きずり下ろさなかったのか？」

子どもの対話の様子	教師の指導の様子
○対話をとおして気付いたことを、問いにして発言し、その問いに基づいて対話が展開された。 ○登場人物と自分の心情を比べ、自分ならどうするか、どう考えるかを、これまでの経験や日常生活と関連付けて考え、発言していた。 * 対話が沈黙することが2回あった。	○教材のイラストを提示し、対話の内容を構造的に可視化していた。 ○曖昧で、うまく言葉にできないこと内容を、子どもに聞きながらキーワードにしていた。 △対話によって考えが変化した子どもに注目しすぎてしまった。

なりたい自分をめざす子どものための教師の視点や授業の在り方

- ・ 子どもが問いを選んだ理由や背景を吟味し、そこにある問題意識を対話で探究していくことが大切。
- ・ 対話の中で「わからないこと」「知りたいこと」を声に出し、教師も子どもと考えるが大切。
- ・ 子どもたちが考えている沈黙の時間を教師が待つことができるかが、対話におけるポイントになる。

## (2) 令和5年度の学びのまとめ

令和5年度は様々な機会での授業実践や研究、報告を行いました。

日付	内容
5月12日	職員研修 研究の論立て・職員 p 4 c・めざす子どもの姿の共有
6月29日	新潟県下越教育事務所 佐渡市教育委員会 学校支援訪問 6学年 川上教諭 公開授業研修 6学年道徳「自然愛護」 下越教育事務所 平野 徹 様 講義「特別の教科 道徳について」
8月1日	東京大学 大学院 准教授 一柳 智紀 様 講義「学びが深まる対話」について
8月24日	新潟大学 准教授 豊田 光世 様 下越教育事務所 平野 徹 様 研究に関するスーパーバイズ「今、道徳と p 4 c について考えていること」
10月11日	上越教育大学 上廣道徳教育アカデミー 特任准教授 菅原 友和 様 役割演技の手法を生かした師範授業 2学年 道徳「二羽のことり」
11月10日	令和5年度文部科学省「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業」 新潟県教育委員会委託研究 道徳教育研究発表会 全学級公開授業
1月18・19日	宮城県川崎市立川崎小学校 森 俊平教諭を招聘しての校内研修会 全学級での森教諭とのTTによる授業実践
1月30日	新潟県 道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業推進協議会 令和5年度 赤泊小学校 実践報告
2月21日	研究の振り返りと次年度の課題の確認、子どもの様子についての状況共有

様々な研修会をととして見えてきた成果と課題については1月30日の実践報告にまとめてあります。

2月21日の校内研修では、1年間の振り返りとして、次のようなことが話し合われました。

- 子どもがつくる問いが、道徳的な問いになってきた。教材の価値に沿うような問いをつくるようになった。  
⇒始めた当初は自由すぎたり、ウケ狙いであったりしたが、問いの質が変わってきた。
- ⇒ただし、教師のバイアスが無意識にかかっているかは、注意する必要がある。
- 子どもの発話量が増え、子どもが自分たちで問い返したりしながら、対話を進めるようになった。
- 授業後の子どもの変容の見取りが難しい。  
⇒“自分事で考える”ということは、発達段階に応じて考えていくと、どのようなことなのだろうか？
- 「がんばっているのに話せない」「振り返りが書けない」などの困り感のある子どもを、どう支援していくか？  
⇒p 4 c での対話の際に、『話せる・話している = ◎』という評価になっていないか。

p 4 c の手法を生かした授業実践をととして、子どもは確実によい方向に変容している。だからこそ、今まで見えること、気付くことのできなかつた課題が見えてきています。これらの課題に対して目を背けることなく、子どもに寄り添いながら、研究の次の階段をみんなで登っていきます。

### (3) p 4 c だけでは、うまくない。

研究の当初は、p 4 c の理解に懸命になり、先行実践を追試するような形で実践が進んでいました。私たちはややもすると、p 4 c をしていれば子どもが伸びると思っていた一面がありました。しかし、うまくいくときもあれば、うまくいかないときもありました。そして何よりも、対話と子どもの様子を分析していくと、発言していない子どもや p 4 c に好意をもっていない子、道徳の学びに苦しさを抱えている子が居ることに視点や話題が集まるようになりました。p 4 c の手法だけで道徳教育を展開していくことは、子どもの考え方や学び方を広げていくことや、教師の道徳の授業力向上には不十分であるとも考えています。

p 4 c の手法を用いた道徳の授業は、月に1回～2回程度実施してきました。また、p 4 c を用いた道徳の授業以外にも、読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習や問題解決的な学習、役割演技の手法を生かした道徳的行為に関する体験的な学習など、様々な学習方法にも取り組んできました。1年間に35時間ある道徳の時間においては、様々な学習方法を用いて、学びのバランスを意識して授業を行うことが、道徳性の育成にとって大切であると考えています。

今、それぞれの教師が、一人一人の子どもたちを、全ての子どもたちを見つめています。そして、子どもの思いと実態に合わせた学習方法の中で、どのようにして p 4 c を生かした道徳授業を展開するのかを模索しています。今後も変化を恐れずに授業に挑んでいきます。

